

部活動経験は自己変容にどのように寄与するのか

— 転機の語りに着目して —

森村 仁美 (競技スポーツ学科 スポーツ情報戦略コース)

指導教員 豊田 則成

キーワード：転機, 自己変容, 部活動経験

1. 緒言

本学陸上競技部を引退した4年生を対象に「転機をどのように語るのか」というリサーチクエスチョン(Research Question:RQ と以下略記)を設定した。また、質的にアプローチすることにより発展継承可能で有益な仮説的な知見を導き出すことを本研究において目的とした。

2. 研究方法

インフォーマント (Informant 調査対象者: Inf.と以下略記) を、大学陸上競技部に所属している4年生で引退した者8名とした。

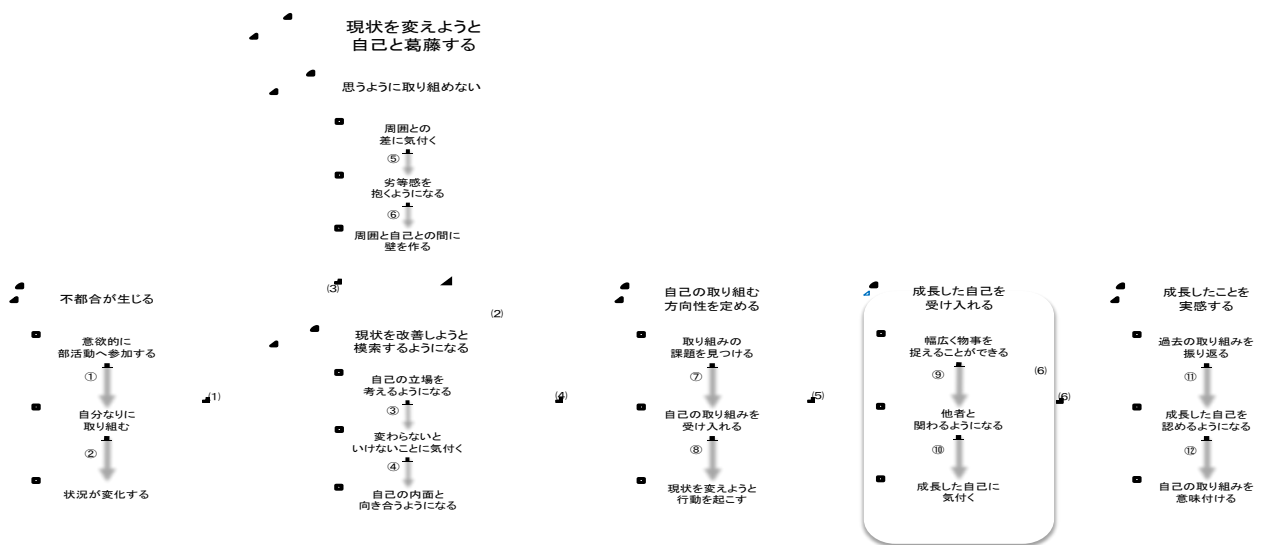
各 Inf.に対して、1対1形式の半構造化インタビューを30分程度実施し、質的研究法の代表的手法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ(Grounded Theory Approach:GTA と以下略記)を用いて分析を行った

3. 結果と考察

本研究では、上記のRQに対し質的にアプローチした結果、「不都合が生じることで現状を変えようと自己と葛藤するようになり自己の取り組む方向性を定めるようになる。その結果、成長した自己を受け入れるようになり成長したことを実感すると語る」という仮説的な知見を導き出した。Fig.1では転機により自己の取り組みを意味付けるプロセスを示した。

4. まとめ

部活動を引退した者は、部活動経験を振り返った際に転機を肯定的に捉えることで自己の取り組みを成長のきっかけであると意味付けることができる。



RQ: 転機をどのように語るのか

Fig.1: 転機により自己の取り組みを意味付けるプロセス